

Working
Eating
Playing
Sleeping
Staying

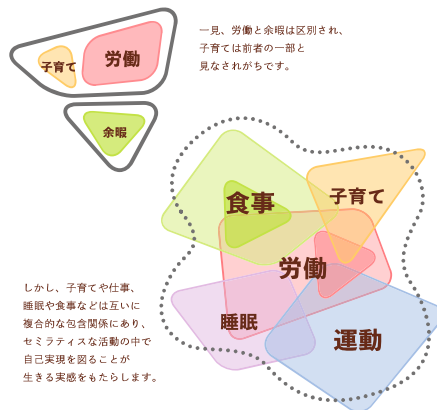
KENCHO AMAZING PARK

Future Vision

WELL-BEING = よく生きること

近年、若者の労働観について「タイムパフォーマンス」という言葉をよく耳にします。これは、労働と余暇を分離して考え、勤務時間はただ効率的に業務をこなし、余暇にできるだけ時間を割こうという考え方です。

しかし、人間が「生きる」というのは、そんなに単純なものでしょうか。働くこと、食べること、寝ること、子を育てること、旅をすること、買い物をすること、**全てがひとつながりの生活の中で、コミュニティを形成し、自己実現を図ること、それが新しいウェルビーイングの形です。**



モビリティの活用と お団子型の回遊性

県庁周辺エリアには、路面電車の他、シェアサイクルのネットワークや、ノルディックウォーキングボルのレンタルスポットなども充実しています。こうしたモビリティを最大限に活かし、ウォークアブルなまちとして地域全体の回遊性を高めるためには、小さな目的地が連続してあることが肝要です。ちょうど富山市がお団子と串の都市構造によってコンパクトなまちづくりを目指しているのと同じように、スムーズに移動できる経路と、その途中途中で休憩したり、食事をしたり、写真を撮ったり、人と話したりするための場が両方あってはじめて賑わいがまち全体に連続します。本計画では、県庁舎を南北に貫く**パブリックな動線(串)と、多様なアクティビティを受け止める公園(団子)**を計画します。

都市のスポンジ化と 豊かさをつくる余白としての公園

県庁エリア周辺を俯瞰して見てみると、周囲に比べて街区割が大きく、学校や駅、美術館、ホテルなど、大きな建物が建ち並んでいることが分かります。これは、かつて東側に大きく蛇行していた神通川を埋め立て、公共性の高い土地利用を進めたことによるものです。

しかし昨今、大規模な建築物は老朽化に伴って、維持管理のためのコストや消費エネルギーの問題が顕在化し、**徐々に大規模な街区はその用途を見出せず、スポンジ化していくことが予想されます。**

都市にできた空隙を建築で無理やり埋め尽くすのではなく、**周辺のアクティビティを受け止め、人々の日常を豊かに拡張する場として、おおらかな広場を計画します。**

Urban Strategy

1543



富山城築城

1899



富山駅開業

1935



埋立・区画整理
県庁舎建設

20XX



今後大規模街区の
スポンジ化



線のネットワークを介して
富山市ガラス美術館と連携

富山県美術館
富山運河
コーヒーショップ

住宅ゾーン

富山赤十字病院

神通川

北陸新幹線

過度な密集により
松川沿いにSOHOを誘致

松川

業務ゾーン

旅行者のスーツケースを
県庁前から富山駅新幹線ホーム
までトラムで運ぶサービスを導入

商業ゾーン

文教ゾーンと積極的に
産学連携の取り組みを実施

文教ゾーン

至富山大学
富山大橋

すずかけ通り

城址大通り

城址大通りは歩行者優先の
道路として整備

地域周遊・長期滞在の拠点として
宿泊機能を拡充し、会議・イベント
機能を強化

市役所

県庁

富山城跡

アーケードを緑化すると同時に
県庁前公園で販促イベントを開催

商業ゾーン

富山市立図書館 &
富山市ガラス美術館

大和百貨店

広がる緑とつなぐ緑

それぞれに特徴のあるオープンスペースが各所に広がり、憩いと
楽しみの空間を提供することは大切ですが、地域全体の回遊性を
高めるには、オープンスペース同士をつなぐ歩行者空間や路面電
車などのモビリティが充実していることは、それ以上に重要です。
城址大通りを歩行者中心の緑あふれる通りとして総曲輪エリア
まで延長するとともに、路面電車を県庁前広場に乗り入れること
で、周辺街区全体に賑わいの好循環をもたらします。

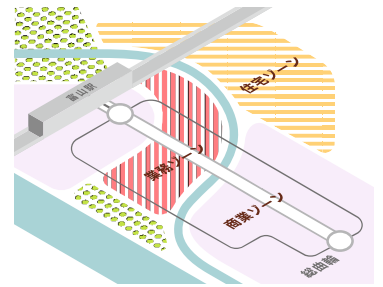
1

Parks as Spaces for Living

仕事中心の場所から生活と一体化した場所に

富山駅と県庁周辺は、主に働く場、買いを行う場、学ぶ場が中心に
据えられており、憩う場や住まう場は東や北にはずれた場所に位置
しています。県庁周辺エリアを暮らしに寄り添う生活中心の場とす
ることで、コンパクトな混合用途の中で都市の機能を整えます。

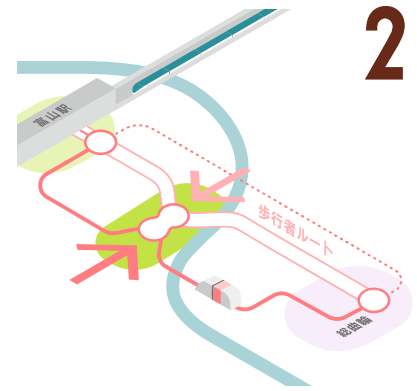
新旧の建物が共存するエリアに、異なる時間帯ごとに多様な人々
が訪れることは、都市を親しみやすく、持続可能なものとしします。



2

Transit Mobility

多様なモビリティの結節点



新幹線、路面電車、スモールモビリティ、自転車、歩行者と、移動の距離
や頻度によって、移動手段を自由に選択することのできるモビリティの
ハブとして広場を位置付けることが、地域全体の連続性・回遊性を高め、
周辺街区に賑わいをもたらします。

城址大通りは歩行者のための空間として開放する一方、すずかけ通り側
には、地下集約駐車場の入口と路面電車及びスモールモビリティのステ
ーションを整備し、富山ならではのパークアンドライドを実践します。

また、ドロップオフステーションを設け、新幹線を降りた瞬間から、
帰りの新幹線に乗る直前まで、手ぶらで街中を散策できる、ウォークア
ブルなまちをつくります。

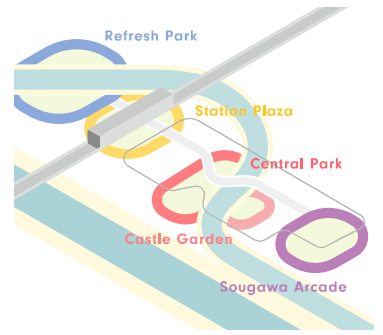
3

Open Space Diversity

選択可能なオープンスペースの多様性

敷地周辺には、開放的な水辺（富山運河環水公園）、賑わいのある
交通広場（富山駅前広場）、地理や歴史を感じられる城跡（富山城
址公園）、ファッションと文化の発信地としてのアーケード（総曲
輪通り商店街）など、個性豊かなオープンスペースが存在します。

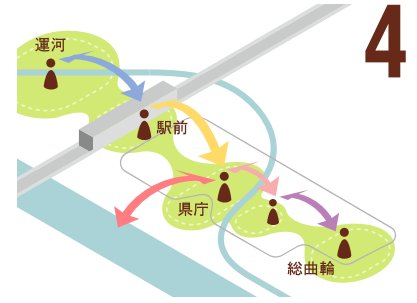
その中で、県庁前の空地を日常の通勤や子育て、寝食に寄り添
った新しい公園と位置付けます。来街者・従業者・居住者それぞれが、
特色のあるオープンスペースの中から、気分や時間帯に合わせて、
自らが過ごす場を選択することが可能です。



4

Stepping Activities

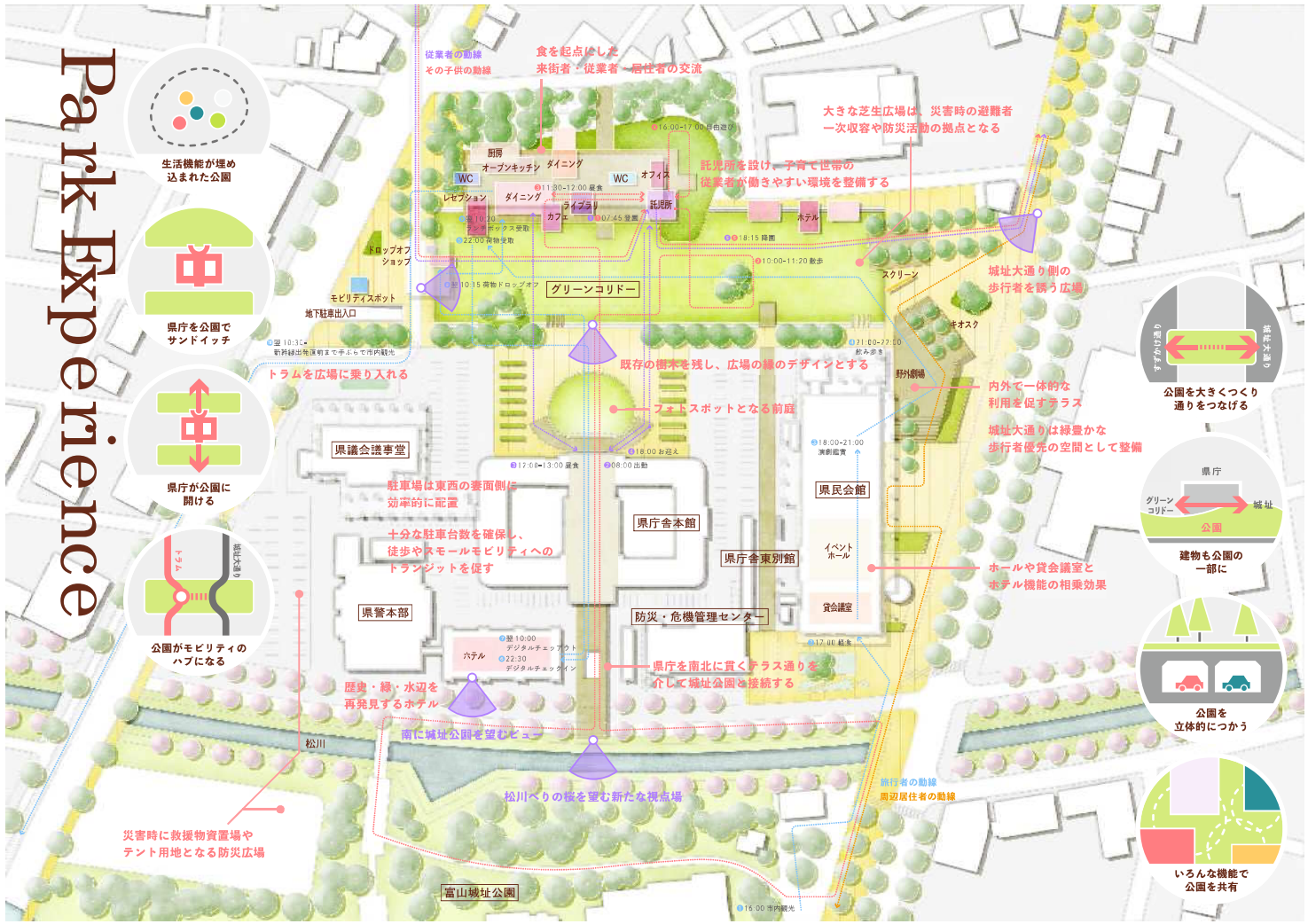
飛び石型のアクティビティ



コンパクトで持続可能なまちづくりを行う上で、新幹線の停車駅と県
の機能の中心である県庁エリアとが近接していることは、大きな強みです。

一方で、親水空間の中心である富山運河環水公園と商業の中心である
総曲輪エリアはそれぞれ南北に離れています。県庁エリアにアクティビ
ティの拠り所となる公園をつくることで、それらを一続きのシーケンスと
して連続させ、地域全体の活性化を図ります。また、宿泊機能を付加する
ことで、旅行者の地域周遊・長期滞在も促進します。

Park Experience



子育て世代が生き生きと働くことができる街

富山県は、共働き世帯の割合が58.3%と高く^{*1}、育児のための短時間勤務制度等を実施している事業者は89.4%にも上ります^{*2}。富山県の中心部である県庁エリア周辺において、託児所を備えた公園をつくることで、子育て世帯が生き生きと働किながら自己実現を図る場をつくりま

^{*1} 総務省「令和2年国勢調査」 ^{*2} 富山県「令和4年度 賃金等労働条件実態調査」



県庁をまちのシンボルに、働く人をまちの主役に

県庁正面を公園と一体的に修景し、文化財としての建物の価値を高めます。また、働いている人の姿が見える大きな公園は、県内外の多様なプレイヤーが活動する舞台となり、産学官民連携や人々の交流が自然に促されます。新しいまちづくりを推進する県庁とその実践の場が隣接した公園は、まちの求心力・発信力そのものとなり、市民のシビックプライドを醸成します。

